

例会要旨

2013年9月21日

於 筑波大学筑波キャンパス

首都圏郊外における都市化と小規模開発住宅地の変容

一 埼玉県富士見市関沢地区を事例に

西山弘泰（うつのみや市政研究センター・研究員）

本研究では埼玉県富士見市関沢地区を事例に、郊外における小規模開発住宅地の形成とその変容のメカニズムを、3つの主体（農家、建売業者、居住者）の行動とその変化から明らかにした。研究対象地域である埼玉県富士見市関沢地区は、埼玉県の南西部に位置しており、東京都心から25 kmほどの距離にある。当地区は戸建住宅を中心に構成されているものの、集合住宅や商店、事務所などもみられる。また、その合間に農地や駐車場なども混在している。道路は不整合かつ狭隘で、行き止まり道路が多い。

1960年代、70年代前半の関沢地区は、首都圏郊外の縁辺部に位置し、地価が相対的に安い場所であった。建売業者は、若年層の住宅需要を見込んで狭小・低廉な建売住宅を建設した。それまで農業収入で生計を立てていた農家は、土地売却を契機に転業し、都市的生活と安定した現金収入を得た。居住者は、より良い住まいへとステップアップする踏み台として、狭小・低廉な建売住宅に入居した。1970年代後半になると、都市化の波はより郊外へと移動し、関沢地区は郊外の住宅地としては相対的に地価が高い、一般的な近郊住宅地へと変化した。農家は生活が比較的安定したことで土地売却は減少した。しかし地価の上昇によって土地の評価額が高くなったため、相続が発生した場合に土地の売却が必要になった。居住者は、子どもの成長や住宅の陳腐化のために、地価の上昇を利用して住宅を売却し、より質の良い住宅の確保へと向かった。業者はそうした需要に応え、平均的価格の中規模建売住宅を建設した。1990年以降は地域が成熟し生活利便性が高まるとともに、最寄り駅や都心のターミナル駅に容易にアクセスできる既成市街地（まちなか）へと変化した。各種サービスへのアクセシビリティの向上によって、関沢地区は多様なニーズを満たすことができる住宅地になり、業者も多様化した需要に対応するため、住居形態や価格などが幅広くくなっていく。

以上のように関沢地区における小規模開発住宅地の形成は①1960年代に都市化を迎えた地域であったこと、②鉄道駅や既存インフラとの近接性が高かったこと、③小規模開発住宅地に適した土地所有や地形・土地利用であったことが主な要因である。そうした条件の下、都市化の進展による空間的位置付けの変容が関沢地区と各主体の行動に変化をもたらし、それが重なり合うことで今日の関沢地区が形成されていった。

私の研究遍歴 ー人文地理学のアイデンティティ再考ー

阿部和俊（愛知教育大学・名誉教授）

「私の研究遍歴ー人文地理学のアイデンティティ再考ー」というテーマで発表をする機会をいただいたので、これまで過ごしてきた時代や友人とのこと、地理学とくに都市地理学との関わりについて報告した。私は先に「人文地理学のアイデンティティを考えるー都市地理学を中心にー」という小文を『人文地理』(2007)に発表しているので、今回の報告はそれをさらに包括したものでもある。

報告は①名古屋大学の学生時代、②名古屋大学の院生時代、③愛知教育大学に就職して以後ーソルボンヌ留学を境に二分ーに分けて行なった。学生時代は、ベトナム戦争や大学闘争・学園紛争の時代で落ち着かないものであった。教養部時代には自然科学系の単位取得に苦勞したこと、羽仁五郎の『都市の論理』(1968)がベストセラーとなって「都市」なるものが研究のテーマになるのかというようなことを思ったりしたことが記憶にある。

学部の授業では、応地利明先生担当の「フランス地理書講読」から強烈な印象を受けた。フランス語は大学受験時に深い考えもなく選んだ第2外国語にすぎないのだが、この授業で杉浦芳夫氏と知り合い、ポール・クラヴァルを教えてもらうなど影響は大きかった。人生における偶然性を思わざるをえない。学部時代、北九州5市合併のことを調べたりしたが、卒業論文では経済的中枢管理機能からみた都市分析に取り組んだ。卒論は「日本の主要都市における経済的中枢管理機能に関する研究」として『地理学評論』(1973)に掲載されたが、自分の論文でありながら、このタイトルには違和感があって、後に都市地理学は「都市を」研究するものなのか「都市で」研究するものなのか、ということを考える素地になった。

大学院の修士論文では、経済的中枢管理機能を指標として日本の都市を歴史的に分析することを決めていたが、同時に日本の中心地研究・都市の順位規模研究・都市の内部構造研究に疑問を抱いていた。いずれも欧米で確立された理論の日本への適用であるが、ほとんどの研究が日本でもあてはまるという結論になっていることに疑問を感じていたからである。このことは後々、海外研修や留学時の体験で自分の疑問が正しいという確信を得るにいたった。

ソルボンヌへの留学で印象に残ったことはクラヴァル先生の研究生産力である。研究は連続して常に発表し続けることの重要性を身にしみて感じた。多産性と連続性である。

現在まで経済的中枢管理機能を指標とした世界の都市体系研究が私の関心の中心であるが、そこに共通性はあるのか、日本の特異性はあるのかといったことを見極めたいと考えている。同時にやはり都市地理学とは「都市を」地理学的に研究するものではないかと考え続けてもいる。